

社会ダーウィニズムとドヴォジャーク — チェコ社会における音楽の「進化」と「退化」—

福田 宏 (hfukuda@slav.hokudai.ac.jp)

北海道大学スラブ研究センター

はじめに

報告の目的：国民形成の主題に基づく変奏曲 (variations) を分析する

言語、文学、歴史、知の体系、体操 (福田 2006)、音楽、建築、絵画 etc.

Basso Ostinato (執拗低音) としてのオリエンタリズムと社会ダーウィニズム

「辺境」民族の存在理由はいずこに？ → 自作自演のオリエンタリズム

国民楽派の課題 → エグゾチシズム (オリエント) と近代性 (進化)

ex. 万国博覧会における日本帝国の苦悩？ (吉見 2010)

国民楽派をより広いコンテクストの下で理解する

1. オリエンタリズム批判とドヴォジャークは如何にして結びつくのか

A. サイドの忘れ物 (?) → オリエンタリズム批判の音楽への拡張

メジャーな方法としてはオペラ分析 (マッケンジー 2001) ~ ex. 《蝶々夫人》

例えば、ドヴォジャークの《アルミダ》(1903) (Nedbal 2007)

異教徒の魔女アルミダと十字軍の勇士リナルドの悲恋

東と西の境界が曖昧に... (典型的な構図の不成立)

(勇敢な白人テナー vs. 幻惑的ソプラノ + 野蛮なバリトン曾長)

B. 帝国による「未開社会」の音楽への眼差し (Zon 2007)

チェコ出身のドイツ系音楽学者 Richard Wallaschek (1860-1917)

未開民族の原始舞踊 → 民族舞踊 → 普遍芸術 (誰でも可能性がある！)

シューベルト、ショパン、リスト、そしてモーツァルトも

C. オリエンタリズム批判をさらに拡張する (内なるオリエンタリズム)

不安の裏返しとしての反ユダヤ主義 (ギルマン 1997、福田 2006, ch.5)

弱肉強食の世界観 → 「文明」であることへの強迫観念

中央ヨーロッパにおけるオリエンタリズム

「辺境」におけるヨーロッパの過剰さ (篠原 2008, クンデラ 1991)

D. 用語の新しさ：社会ダーウィニズムの多義性と進化

チェコにおけるダーウィニズムの浸透 (Hermann & Šimůnek 2008)

先駆者としての音楽美学者ホスチンスキー (1847-1910) (Stibrál 2010)

詩と音楽の統合が国民芸術にとって重要 → 総合芸術の擁護

ヴァーグナーに傾倒し、進歩、そしてスメタナを支持

2. ドヴォジャーク — 「進歩」と「退化」のはざままで

A. ドヴォジャークの成功物語と「辺境」民族の文明化

熱狂的な「鉄道オタク」と類い希なる鳩好きとして → 素朴さの典型？
肉屋の息子（9人兄弟の長男）→ 才能を見いだされる → ブラームスの評価
ピアノ連弾《スラヴ舞曲集》が空前の大ヒット → ニューヨークの音楽院へ
度重なる訪英とケンブリッジ大の名誉博士号（1891）

人里離れたボヘミアの片田舎に生をうけ、困難と障害を乗り越え高みに至りしそなたは、自らの非凡な才能により、生地の音楽芸術に特有なものをすべてを生かしつつ、祖国の名声を輝かしきものとした。...(Kuna, vol.9, pp.258-260) (ブリアン 1983 の関根訳を参照) (当時のボヘミア・イメージ → Sayer 1998).

B. 「辺境」民族の進歩なのか、それとも、音楽の退廃を招く疫病神か？

社会ダーウィニズムにおける「辺境」民族の文明化
結局は「上から目線」？ キャリバン？
ドヴォジャークの「分かりやすさ」が嫌われたのか？
退化の典型 (アドルノ 1999)

→ 「流行歌のパッチワーク」

「通俗名曲の十八番」(1960年代の吉田秀和)

ウィーンでの不遇→チャイコフスキーよりも危険？

C. 激烈なるスメタナ＝ドヴォジャーク論争

ドヴォジャーク優勢からスメタナ優勢への流れ
音楽学者 Z. ネイエドリー (1878-1962) の「貢献」
ドヴォジャークの悪夢 → 遺族の苦悩

D. ドヴォジャークの隠された病？ (Beckerman 2003)

演技する(?)ドヴォジャーク

イギリスにおける2度のインタビュー

ドヴォジャークのホームシックとアルコール依存

一人では外を歩けない大作曲家 (渡米前から?)

→ 広場恐怖症(agoraphobia)とパニック障害(panic disorder)の兆候



おわりに — 今後の課題

1. スメタナ＝ドヴォジャーク論争における不可解さ (cf. 内藤 2002 etc.)

1912年8月14-15日、ドイツ・ピルモン(Pyrmont)のドヴォジャーク音楽祭

2. 新ドイツ派との関連性：リスト、ブラームス、そして、ヴァーグナー

参考文献（最近の動向を示すものも含めて）

- Michael Beckerman, *New Worlds of Dvořák: Searching in America for the Composer's Inner Life* (New York/ London: W. W. Norton & Company, 2003). 特に、ドヴォジヤークの病を扱った 13 章 The Master is not well を参照。
- Leon Botstein, “Reversing the Critical Tradition: Innovation, Modernity, and Ideology in the Work and Career of Antonín Dvořák,” In: Michael Beckerman (ed.), *Dvořák and His World* (Princeton University Press, 1993), pp.11-55.
- Jarmil Burghauser, *Antonín Dvořák* (Praha: KLP, 2007). 英訳あり。
- David R. Beveridge (ed.), *Rethinking Dvořák: Views from Five Countries* (Oxford: Clarendon Press, 1996).
- Benjamin Curtis, *Music makes the Nation: Nationalist Composers and Nation Building in Nineteenth-Century Europe* (Cambria: Amherst, 2008).
- Otakar Dvořák, *Můj otec Antonín Dvořák* (Příbram: Knihovna Jana Drdy, 2004). 息子による回想録。本書の英語版は Idem, ed. by Paul J. Polansky, *Antonín Dvořák, My Father* (Czech Historical Research Center: Spillville, Iowa, 1993). 両者の相違点に注意。
- Tomáš Hermann, Michal Šimůnek, “Between Science and Ideology: The Reception of Darwin and Darwinism in the Czech Lands, 1859-1959,” In: Eve-Marie Engels, Thomas F. Glick (eds.), *The Reception of Charles Darwin in Europe* (London/ New York: Continuum, 2008) (2 vols.), vol.1, pp.199-216.
- Otakar Hostinský, *Das Musikalisch-Schöne und das Gesamtkunstwerk vom Standpunkte der formalen Aesthetik* (Leipzig, 1877). [抄訳 In: Bojan Bujic (ed.), *Music in European Thought 1851-1912* (Cambridge University Press), pp.132-151].
- Milan Kuna, et al (eds.), *Antonín Dvořák, Korespondence a dokumenty: kritické vydání* (ドヴォジヤーク一書簡・史料集) (Editio Bärenreiter Praha, 1987-2004), 10 vols.
- Martin Nedbal, “Dvořák's Armida and the Czech Oriental ‘Self,’” *Current Musicology* 84 (2007), pp.25-51.
- Rüdiger Ritter, “Musik als Element der Legitimierung der Tschechischen Nationalkultur in der Zwischenkriegszeit,” *Bohemia* 47:1 (2006/07), pp.52-68.
- Derek Sayer, *The Coasts of Bohemia: a Czech History* (Princeton University Press, 1998).
- Otakar Šourek, *Život a dílo Antonína Dvořáka* (Praha: Hudební matice Umělecké besedy, 1954-57), 4 vols.
- Karel Stibrál, “Durdík a Hostinský: počátky darwinismu v Čechách” (Durdik and Hostinsky: The Origins of Darwinism in Czech Lands), *Teorie a vědy* 32 (2010), pp.319-339.
- Christopher P. Storck, “Die Symbiose von Kunst und Nationalbewegung: Der Mythos vom ‘Nationalkomponisten’ Bedřich Smetana,” *Bohemia* 35:2 (1994), pp.253-267.
- Richard Wallaschek, *Ästhetik der Tonkunst* (1883) (Reprint: Nabu Press, 2010).

- Idem, *Primitive Music: An Inquiry into the Origin and Development of Music, Songs, Instruments, Dances, and Pantomimes of Savage Races* (1893) (Reprint: Cambridge University Press, 2009).
- Bennett Zon, “Representing Non-Western (Asian) Music in Nineteenth-Century in Britain,” Paper at the International Symposium “Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries,” July 7-9, 2010, Slavic Research Center, Japan [Not for citation]. その他、Zon氏には関連業績多数あり。
- Th. W. アドルノ、高辻知義、渡辺健訳『音楽社会学序説』平凡社ライブラリー、1999年。
- 大角欣矢「チェコ『国民楽派』考」『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 2004年日本公演』(プログラム冊子)、2004年。
- サンダー・L. ギルマン、管啓次郎訳『ユダヤ人の身体』青土社、1997年。
書評：<http://hfukuda.cool.ne.jp/review/review0202.htm>
- ミラン・クンデラ、里見達郎訳「誘拐された西欧—あるいは中央ヨーロッパの悲劇」『ユリイカ』1991年、pp.62-79.
- 小山哲「闘争する社会—ルドヴィク・グンプロヴィチの社会学体系」阪上孝編『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会、2003年、pp.193-236.
- 篠原琢「地域概念の構築性—中央ヨーロッパ論の構造」家田修編『開かれた地域研究へ—中域圏と地球化』(講座スラブ・ユーラシア学 1)、講談社、2008年、pp.119-141.
- 内藤久子『チェコ音楽の歴史—民族の音の表徴』音楽之友社、2002年。
- 同『ドヴォルジャーク』(作曲家◎人と作品シリーズ) 音楽之友社、2004年。
- 同『チェコ音楽の魅力—スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク』東洋書店、2007年。
- カレル・V. ブリアン、関根日出男訳『ドヴォルジャークの生涯』新時代社、1983年。
- P. J. ボウラー、岡寄修訳『進歩の発明—ヴィクトリア時代の歴史意識』平凡社、1995年。
- クルト・ホノルカ、岡本和子訳『ドヴォルザーク』音楽之友社、1994年。
- ジョン・M. マッケンジー著、平田雅博訳『大英帝国のオリエンタリズム—歴史・理論・諸芸術』ミネルヴァ書房、2001年。
- 吉見俊哉『博覧会の政治学』講談社学術文庫、2010年。
- 福田宏『身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006年。
- 同『『国民楽派』を超えて—近代のチェコ音楽とは?』『フィルハーモニー』76巻2号、2004年9月、pp.23-27. <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika09.htm>
- 同「スウェーデンにおけるスメタナと交響詩—国民楽派の前と後」『フィルハーモニー』80巻8号、2008年10月、pp.25-28.
- 同『『国民楽派』再考—想像の共同体としての《わが祖国》』『フィルハーモニー』81巻2号、2009年2月、pp.31-38. http://dl.dropbox.com/u/202438/200902_Smetana.pdf
- 同「遅れてきた野獣—ヤナーチェクの愛・信仰・愛国心」『フィルハーモニー』81巻10号、2009年12月、pp.19-24.
- 同「進化と退化のはざま—ドヴォルザークの『親しみやすさ』と苦悩」『フィルハーモニー』82巻5号、2010年6月、pp.40-45. <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika13.htm>